

Title	文明化論と感情社会学
Sub Title	Zivilisationstheorie und Emotionssoziologie
Author	岡原, 正幸(Okahara, Masayuki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2010
Jtitle	哲學 No.124 (2010. 3) ,p.109- 138
JaLC DOI	
Abstract	<p>Die Begriffe Zivilisation und Emotion bezeichnen menschlichen/sozialen Verhaltensdispositionen, die eine Gesellschaft oder eine Person im Verlauf ihrer Entwicklung und Veränderung strukturieren. Norbert Elias veranschaulicht in seiner Hauptschrift seine Grundannahmen einer unauflöslichen Verflechtung von Individuum und Gesellschaft. In seiner Zivilisationstheorie steht eine Idee von Affektkontrolle, die im Laufe der Zeit sich versteigert, in der Mitte. Zivilisation und Emotion verbinden die mikrosoziologische Ebene des Gefühlslebens von Individuen mit der makrosoziologischen Ebene der gesellschaftlichen Strukturen. Andererseits behauptet die mehr oder weniger neu in der Geschichte der Soziologie erschienen Emotionssoziologie, dass menschlichen Emotionen durch zweierlei sozial geprägt sind: Zum einen sind sie durch soziale Normen der Gesellschaft reguliert oder kann man sagen, konstruiert. Zum zweiten versucht ein Individuum in der sozialen Interaktion sein eigenes Gefühl in der von Vernunft geleiteten Weise zu kontrollieren. Die Idee von Elias und die Richtung von Emotionssoziologie sind eng miteinander verbunden. Z. B. spricht Elias über die beständige Zunahme zivilisierten Verhaltens, die äussere Zwänge zu Selbstzwängen mache, wie die Soziologie der Emotion über die zunehmend verbreitete Emotionsmanagementgesellschaft spricht.</p>
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000124-0109

ご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

文明化論と感情社会学

岡 原 正 幸*

Zivilisationstheorie und Emotionssoziologie

Masayuki Okahara

Die Begriffe Zivilisation und Emotion bezeichnen menschlichen/sozialen Verhaltensdispositionen, die eine Gesellschaft oder eine Person im Verlauf ihrer Entwicklung und Veränderung strukturieren. Norbert Elias veranschaulicht in seiner Hauptschrift seine Grundannahmen einer unauf löslichen Verflechtung von Individuum und Gesellschaft. In seiner Zivilisationstheorie steht eine Idee von Affektkontrolle, die im Laufe der Zeit sich versteigert, in der Mitte. Zivilisation und Emotion verbinden die mikrosoziologische Ebene des Gefühlslebens von Individuen mit der makrosoziologischen Ebene der gesellschaftlichen Strukturen. Andererseits behauptet die mehr oder weniger neu in der Geschichte der Soziologie erschienen Emotionssoziologie, dass menschlichen Emotionen durch zweierlei sozial geprägt sind: Zum einen sind sie durch soziale Normen der Gesellschaft reguliert oder kann man sagen, konstruiert. Zum zweiten versucht ein Individuum in der sozialen Interaktion sein eigenes Gefühl in der von Vernunft geleiteten Weise zu kontrollieren. Die Idee von Elias und die Richtung von Emotionssoziologie sind eng miteinander verbunden. Z. B. spricht Elias über die beständige Zunahme zivilisierten Verhaltens, die äussere Zwänge zu Selbstzwängen mache, wie die Soziologie der Emotion über die zunehmend verbreitete Emotionsmanagementgesellschaft spricht.

* 慶應義塾大学文学部教授

はじめに～文明化という感情統制の構図

感情とエリアスの文明化論との関連について、岡原[2009]では、エリアスの個人史や文明化論の受容や批判も紹介しつつ、文明化論なるものが、その実、感情様式の長期的歴史的な変化のパターン、つまり感情統制の高度化という、いわば感情文明化論でもあることを明らかにした。感情社会学への架橋にあっては、感情統制の方向性が、禁止抑制の方向だけではなく、ある感情を肯定的に産出するモメントをも含み込んだものであること、つまり感情社会学の公理ともいえる認識をエリアスが有していたことを確認した。

感情文明化論は、エリアスの様々な著作で展開される。本稿の目的は、エリアスのスポーツ論および近代人論を取り上げ、感情文明化という議論さらには感情それ自体に関する議論がどのように深化されたのかを確認することである。その上で、エリアスの感情文明化論の中に、感情社会的な認識にとって、いかなる貢献が見いだされるべきかを最後に検討したい。

1. スポーツの発生～暴力と文明化

『文明化の過程』で言及された論点[1977: 388]、つまり攻撃的情動の抑制・統御という現象、並びにその現象がスポーツ競技という社会的に公認された情動表出の形式を随伴するという現象、この二つがスポーツを主題にしてより詳細に展開される。

エリアス[1986: 93-94, 1995a, 1995b]によれば、英国にその語源を持つ「スポーツ」は、十九世紀前半には貴族的な余暇活動としてエリート層に普及し、十九世紀後半には主に球技として各階層に受容された。その際、たとえばフットボールの変容は規則化、画一化への長期的な発展をたどり、1863年にはルール¹の成文化もなされる¹。彼が目にするのは、古代

と近代では身体的競技における暴力の許容度に著しい差異があることである。そしてこの差異を文明化論のモデルにより説明することが試みられる。

議論の構図はいたって簡潔である。古代ギリシャでは知性や道徳よりも、価値としては、容貌・体力、身体の均斉、耐久力などが重んじられ、それらを証明した身体的競技の勝利者は社会経済的な指導階層への参入を認められたのである。また市民生活においては国家による安全保証を得られず、自己の保存には自ら戦うことが余儀なくされていた。そのため身体的暴力はちまたにあふれ、当然のこと、暴力への罪悪感や反感も育たなかった。内在的な統制審級となるべき「良心」という概念も古代ギリシャ社会では構成されていない。つまり「ギリシャ都市国家において、身体的暴力に対する制度的な独占・統御はまだほとんど進んでいなかった」[1986: 99]のである。こうして、レスリングやボクシングなどの競技で、死をも辞さない暴力性が発揮され、観客も抵抗を覚えずにそれを観戦することができたのである。

一方、ルールに拘束され、暴力の発現を抑制された余暇活動、そのひとつとして発明された「スポーツ」は十八、十九世紀の英国の社会構造との平行関係の中で理解される。ただし世界史的にどうしても強調されるような、当時の英国の経済制度や政治制度と「スポーツの発明」の因果関係がそこで主張されるわけではない。たとえば、スポーツを余暇活動と考えれば、余暇＝非労働という発想から、英国の産業革命にスポーツ発生の原因

¹ ダニング/シェアード[1983]ではフットボールの文明化の過程がより詳細に描かれている。伝統的民俗的ゲームと現代スポーツとの構造的特質を比較し、ルールやボールの規格化の程度、競技者の役割分化の程度、競技者と観客の区別などと共に、次のような差異を指摘している[40-41]。公認される肉体的暴力の程度、感情にもとづく自発的行動の程度、「戦闘の興奮」が自発的に産出されるか・昇華されるか、体力とスキルの相対的位置関係など。まさしく文明的な感情統制が民俗ゲームから現代スポーツへの変遷の中で高度化したことが示される。

を求めようとする見方が生まれかねないが、エリアス [1995b: 219] はそれを排し、「産業化とスポーツ化の両者が、個々の成員にさらに多くの行動の規則性と分化を求めるヨーロッパ社会のより深いところに存在している変化の徴候であったということも考えられる」と述べている。また議会制・政党制という政治構造がスポーツ発生の原因でもない。「十八世紀に現れたようなスポーツと議会は両者とも、イギリスの権力構造、および支配的集団として先行の闘争から出現した部類の人々の社会的習慣における同様の変化に特有のものであった」 [1995: 57] と述べ、当時の政治制度それ自体が、暴力による権力闘争に終止符を打ち、討議による利害調整や意思決定を「制度化」したものであり、それは暴力の抑制、平和化という長期的な発展の成果であることを強調する。そしてそれとまさに平行して、情動的暴力的発現の社会的抑制という要請に呼応して、ルール化されたゲームとしての身体競技であるスポーツが発生するとされるのである。

さて詳細に吟味するまでもなく、以上の構図が示すのは、暴力という攻撃的情動の抑制が、身体的競技という活動において、古代ギリシャ社会と近世英国社会の各々のフィギュレーションに応じて達成され、その抑制程度は歴史と共に高度化した、ということである。つまりエリアスは、特定の経済制度や政治制度も、そしてスポーツも、いわば広義の文明化過程に包摂して理解しようとしたのである。さらにその上、文明化論が『文明化の過程』のタイムスパン（中世から近代）を越えて適用されたことになる²。

² ただしギリシャ時代から後続の時代へと直線的な文明化を描いているわけではない。「まず、古代ギリシャで競技が発展するとき、短期間ではあるが文明化へ向かう動きがあった。しかし、すぐに、それに逆行する動きが出てきて、次第に広がっていき、封建時代のはじめにその頂点に達する。その後、再び、身体的暴力に対して人びとを敏感にさせる動きが現れ、はじめは限られた範囲の人びとのあいだから、次第に社会全体に広まっていく。そのうち、この動きは広がる速度を増し、ついに、古代の規範を乗り越えるところまでたどりつく」 [1986: 121].

特殊近代的な身体競技としての「スポーツ」はその暴力性・情動性を低減させてきた、という指摘の次に注視すべきは、日常活動と比較すれば、格闘技や球技などのスポーツは依然として、暴力的で情動的だということである。そこに次の論点がある。

この論点はエリアス [1995]、エリアス/ダニング [1995a, 1995b] で主に扱われるが、そこではスポーツに限定されることなく、余暇活動一般が非余暇活動との対比において議論される。このことをまず了解しておこう（とはいえ芸術などと比して、スポーツがより情動的であることは主張される [Elias 1995: 69]）。

「非余暇的現実の場合には、感情の表明の範囲はある特別な領域に狭められ、限られているのに、余暇活動は、いろいろな方法や程度の差こそあれ、人々の感情に直接訴え、人々の感情を刺激するように定められている。…多くの余暇の追求は、現実生活の状況によって生み出される興奮に類似してはいるが、危険や傷害のないある種の興奮を引き出すように定められた想像上の環境を与えてくれるのである。映画、ダンス、絵画、トランプ遊び、競馬、オペラ、探偵小説、フットボールの試合などがそうである」 [Elias 1995: 59]。蛇足とも思えるが、まず排すべきは、余暇活動が文明化に遅れた取り残された領域、もしくは衝動・暴力抑制の機能不全だという発想である。先に指摘された余暇の現状を、このようなロジックで説明することは論理的可能性としては残されるだろうが、それは彼の主旨ではない。

むしろ積極的な「興奮の探究」、あるいは感情喚起装置とも呼べる文化制度が基本的な社会的機能を果たしているという主張である [1995: 86]。それらは「人々が他の領域で経験する感情に関連している感情を喚起し」「恐怖、同情、あるいは嫉妬や憎悪をかきたてる。がしかし、それは実人生においてよく見られるほどの重大な混乱や危険を招かないようなやり方で行われる」 [Elias/Dunning 1995a: 114]。すなわち余暇活動は「勝利や

喜びばかりでなく、恐怖と悲しみを、愛着や愛情ばかりでなく、憎しみを模倣的に喚起する。このような感情をその象徴的な状況の範囲内、つまり、遊戯、コンサート、絵画、ゲームなどの模倣的状況の範囲内で自由に流動させることによって、それは、非余暇的生活における人々の全般的な抑制の重荷を軽減するのである」[1995: 62].

一見、情動的で暴力的とも思えるスポーツを代表とする余暇活動は、こうして「衝動や感情や情緒の規則的な自制」が生み出す「抑圧の緊張に対する対抗策」として[1995: 58], 「ふたつの矛盾する機能～一方では、人間的感情の楽しい解放と楽しい興奮の完全な喚起, 他方では、楽しく解放された感情を制限するための一組の抑制手段の維持」[1995: 69]を調停し、バランスを取るのである。いわば、抑制の進展に基づき、その発現の機会を失った快樂としての興奮を、安全に提供するための装置としてスポーツが要求されたことになる[Elias 1995b: 252]. この議論の背後には、容易に推察できるが、スポーツを含む余暇活動の生成と文明化との密接な連関が前提されている³. それは前段で述べられた、たとえば身体的競技といった個別の活動領域では、文明化に伴って衝動・情動あるいは暴力的発散の抑制が進展していった、という主張とは別筋のものであり、文明化によって、スポーツ（余暇活動）などの感情喚起的な文化制度が、その社会的必要性を増し、一層確立されていくという、論点である。

次に確認すべきは、このような社会的機能を遂行する感情喚起的な余暇活動が、単なる偶然で恣意的な自然の産物ではなく、ひとつの社会制度と

³ いわく文明化の過程では「人々の行動にかかる抑制は包括的になる。抑制はさらに均一化し、両極の間であまり変動せず、ほとんど自動的に作用する自制的個人的な防御装置として内面化される。ところが、長期にわたる文明化の過程を綿密に分析してみると、このような方向に向かう社会的発展は、社会的、個人的抑制をほどよく解放してくれる対抗運動を生み出すということが示される」[Elias/Dunning 1995a: 93]. そしてスポーツ（余暇活動）とはこの対抗運動に他ならず、それは文明化の過程を経る社会が直面する「快樂と抑制の新しいバランスを発見するという問題」[Elias 1995b: 239]を解決するのである。

して確立しており [1995: 63], したがって社会統制的な規制の範疇に位置するということである。言うまでもなく、スポーツや余暇活動が自由で無制限の感情経験や表出を許可しているわけではない。サッカーに興じるには、ゼロでもなく無限大でもない適切な範囲の感情的態度が要求されるのである。まさしく「感情の抑制の解除それ自体が社会的にも個人的にも規制されている」[Elias/Dunnig 1995b: 138] という事態であり、感情喚起の機構それ自体が社会統制的に統御されていることがわかる。

最後に検討すべきは、エリアスのスポーツ（余暇）論にみられる、社会統制的機能を担った感情喚起的な文化制度というものを、感情統制論とのかかわりで、どのように位置づけるかである。まずは、それが感情統制を果たすことに疑問はない。それも肯定的産出的な方向で感情を煽動するような、感情管理としてである。ただ、感情統制をながめる水準が『文明化の過程』のときとは違うようだ。『文明化の過程』では、統制審級が外的拘束をもたらす他者であろうが、自己拘束を導く「超自我」だろうが、統制の主体はあくまで個人に設定される。個人が自らの感情状態を規範的に管理する、という水準で感情統制が語られる。一方、感情喚起的な文化制度を主題化したスポーツ（余暇）論では、個人的経験の次元ではなく、社会制度の次元に視線がシフトしている。たとえば、歓喜や興奮に身を寄せる個人的経験が語られても、それはそのような経験を可能にする制度的な社会空間に関する議論の内部へと吸収されている。したがって統制主体が想定されても、それは個人ではなく、あくまで社会だということになる。つまり社会が個々人の感情状態を規範的に管理するという水準である。このようにエリアスの議論には、感情統制に関わるかぎり、少なくとも二つの水準、個人と社会が彼の意図に反して見いだされることになる⁴。

社会的水準での感情統制論であることを自覚しつつ、スポーツ（余暇）論がそこに付与する論点を整理しよう。第一に、繰り返したが、煽動的な感情統制の存在。この点は強調されるべきである。なぜなら「感情の統

制」という発想には（近代社会的な偏向によって）、感情を押し殺し、抑圧する、つまり禁止的な色彩が通常あたえられてしまっているからである。そもそもこういった偏向は、規範的に期待される行為とそれを阻害する感情、という非常に限定された行為・感情観だけに依拠した結果である。

第二に、煽動される感情の種類、個人的水準（つまり『文明化の過程』）では、羞恥心・不快感の社会的産出に議論が限定されていたのだが、文化

⁴ 二元論の廃棄を目指した Elias からすれば、この事態は同一事象の二側面あるいは力点の置き方の相違として弁明されるだろう。だが二元論の廃棄が分析上の混乱を招いているかぎり、それは批判の対象になる。たとえばこうである。感情喚起的な文化制度の社会的機能は、抑制が増大する文明化した社会で、感情抑制と感情喚起のバランスをとることに置かれた。それゆえ抑制と喚起には密接な関連が前提とされている。ところが、エリアスの議論ではこの関連性の理解の仕方にバラツキが見られる。一方では、抑制による緊張の弛緩や昇華 [1995: 58]、代償機能 [Elias/Dunning 1995a: 102] をそこに求め、他方では「その機能は、しばしば信じられているような緊張からの解放ではなく、精神衛生の本質的な要素となるあの緊張度の回復である」 [Elias/Dunning 1995a: 130] と述べる。感情の抑制が一方では緊張を高め、他方では緊張を低下させるという、それ自体は矛盾した主張がなされる。いずれを採用しても、感情喚起的な制度が抑制を補完し、それゆえ抑制増大という文明化の過程で、それらの制度の必要性が増す、という主張は可能だ。だがこの矛盾をどのように解すべきか。思うに、個人と社会という二つの水準が密輸入され、混乱を招いたのではないだろうか。前者は用語のフロイト的性格からして個人の心的水準の議論である。個人が抑圧した情動の除反応による治療の効果（フロイト/ブロイアーの医療的カタルシス論）が想定されていると思われる。他方、後者は直接にアリストテレスのカタルシス論から導かれたもので [Elias/Dunning 1995a: 109-117]、悲劇や音楽の機能論を下敷きにする。そこでは感情経験の主体である個人は効果が及ぼされる客体でしかなく、「抑圧された情動」も不必要である。議論の焦点は個人ではなく、演劇や音楽という文化制度である。そもそも心理発生と社会発生の区分、あるいは文明化論が三つの文明化の水準のうち個人的および社会的文明化を扱ったという指摘 [Goudsblom 1984a: 143] からして、個人と社会という二つの水準が導入されていたのは明白ではなからうか。ところで、マクガイア [1992: 107] はエリアスのこのような矛盾した主張について、前者の理解（たとえばスポーツ＝個人的な欲求不満や緊張の解消）は読者の誤解であり、余暇活動は代償機能を果たすものではない、と言う。だがそれはエリアスの議論を浄化しすぎた結果である。

制度が喚起する喜怒哀楽など多様な感情経験・表出がその射程に含まれるようになる。つまり、個々の特殊な制度範囲内部では、それぞれ多様な個別的感情が産出目標となって、それぞれそれに応じた産出方法によって、社会統制的な感情喚起が遂行されると考えられている。いわば煽動的な感情統制が、個別歴史的な西欧の文明化過程という枠組みにおいてさえ、狭く羞恥や困惑だけに限定されるのではなく、感情一般を対象にして執行されていたということである。

最後に、文明化の進展に伴って煽動的な感情統制が一層重要性を増し、スポーツ・余暇活動として制度化していったということである。この論点は『文明化の過程』にある感情管理化論、つまり文明化＝感情統制の高度化であるという考察を、社会的水準で焼き直し、補強し、補足するものとなるだろう。結局のところ、エリアスのスポーツ論から手にすることができるのは、感情管理という傾向が、制度的な平面においても多様な感情を対象にして、進展していったのではないかと想定することである。

2. Homo Clausus と感情

感情に関するエリアスの議論は狭く文明化論に限定されるものではない。ここではエリアスが批判の対象とした近代的人間観(homo clausus)と、主題的に感情が扱われた論考[1987]を土台にして、彼の感情論をより細かく吟味しよう。

2.1 Homo Clausus

1968年に書かれた「序論」[1977: 34-53]で、彼は文明化論のような行動・認識・感情の長期的歴史的発展の視角が阻害される要因として、近代独特の人間観を指摘している。それこそがhomo clausus、つまり「閉ざされ孤立した人間」という観念である。

「完全に自由で完全に独立した存在として、すなわち、内面的に完全に

自立し、一切の他人から隔絶した」[1977: 34] 存在として、行為の目標・計画・決断を他者から束縛されることなく、自分の価値や利害関心に基づいて選択するというモナド的な人間観がそれである。博士論文以来、彼がその批判対象とした哲学的な（カント的）認識主観をはじめ、経済学のホモ・エコノミクス、社会学のホモ・ソシオロジクスあるいは「疎外」概念などに、さらには近代人の日常的な自己経験の中に、その人間観は反映されている[1977: 36, 41, 49]。いわゆる「近代的主体」と呼ばれる人間像がそれである。

自己を「他の一切の存在を事物から内面的に孤立し、完全に自立した個人として」[35] 経験するような、近代において自明化した、この自己経験形式にとって、エリアスが枢要だと考えるのは、「内部」と「外部」という空間的メタファーである[36]。内と外の境界が十分に吟味されることもなく（「肉体や皮膚が境界を成すのか？」）、このメタファーによって、外界から閉ざされた目に見えぬ内面としての個人や自我が想定されるのである。だがエリアスにとって、内面としての個人という自己経験形式の真正さが問題なのではない。重要なのは、そのような「内面性」がどのようにして歴史的に形成されていったかを問うことである⁵。

2.2 内面形成と感情統制

答はまたしても文明化である。ここでは感情統制と内面形成を直載に結びつける彼の議論を確認することにしよう。「文明化の推進を特徴づけて

⁵ 近代的主体性や内面的個人の歴史的形成という観点で、エリアスの議論はフーコー[1977, 1978, 1986]と平行して検討されるべきだろう。その意味で、この両者を理論的な支柱にするウートラム[1993]が興味深い。彼女はHomo Clausus 的身体の歴史的形成を、ジェンダー的視点（つまりHomo Clausus 的身体とは男性の身体であること）および階級的視点（Homo Clausus 的身体とは中産階級の身体であり、近代化・資本主義化とともに勃興した身体であること）を加えて議論している。それはまたイリッチの「経済セックス」を想起させる。

いるいっそう強固で、多面的かつ均齊のとれた情感抑制、あらゆる自発的衝動が制御装置の干渉なしに直接運動として行動の中に発揮されることを、以前よりもいっそう不可避的に阻止する自己統御の増幅、それらが個人の「内面世界」を「外界」から、事情によっては認識主体を客体から、「我」を「他者」から、「個人」を「社会」から分け隔てる殻として、目に見えぬ壁として経験されるものである。他方、運動装置への直接的接近を阻止され抑制された人間の本能・情動衝動が、上述の殻に閉じ込められたものなのである。それらは自己経験において、すべての他人から隠されたものを、時としては本来の自己、個性の核心を意味している」[1977: 47].

要言すれば、文明化における、衝動・情動抑制の増大や自己統御の安定・強化、総じて高度化された感情統制が、内部・外部という自己経験の正体であり、さらには、統制された感情（敷衍すれば、統制という操作の介入によって初めて物象化され実体視される「感情」という物）が空間的に定位される「場」として「内面」が構築された、という主張である。逆に言えば、もし感情統制が（西欧的、歴史特殊的な様態で）存在しなければ、内部・外部の境界は経験されず、当然ながら経験としての「内面」も存在できないことになる。それゆえ、個人の内面的な経験として（ときに本来的自己や個性の本体として）語られるような「感情」も、そこでは成立しないのである。

いわば、感情統制、内面性（主観性）の構築/外的世界（客観世界）の構築（外的世界の構築としては、自然体験における「風景の誕生」[視線の快楽]という論点が提出されている[1977: 46, 1978: 428]), および内的経験としての「感情」の構成、これら三者が等根源的、随伴的な事態として理解されているように思われる。とりわけ、その集約とも言える「感情が内的経験として歴史的に構成される」という論点は、感情の歴史的内在化の命題として記憶にとどめよう（感情の内在化には、歴史的（社会

的/異文化接触的)次元の他に、個人の発達の次元を想定することができる [増山 1991]。さらに、日常経験場面での原理的な感情内在化の機制を問うこともできる [廣松 1986])

近代的主体、あるいは、homo clausus という人間観の根幹である「内面性」の生成が、このように、感情あるいは感情統制と密接な連関の下で議論されている。感情社会学的には十分生産的な示唆ではあるが、エリアス自身の議論として考えるならば、それを「内面性」と「感情」との関係に局限して取り上げるわけにはいかない。あくまでも文明化論の枠組が意識されねばならない。すなわち「内面的主体」や「近代的自我」など多様な呼称を持つ homo clausus は、感情統制を媒介者としつつ、社会構造的変化に対応して形成された歴史的産物だということである。社会分化や分業の進展あるいは人口密度の増大による社会的相互依存関係の高度化というフィギュレイションの歴史的変容が、この近代的人間観を帰結したのである。この意味でエリアスは、homo clausus が「市民的イデオロギーの核心をなす」[1984: 65]とも述べている⁶。

2.3 感情表出概念の歴史性

さて、homo clausus が歴史的な人工構築物とされ、その普遍性あるいは人間学的な定数としての資格を剥奪された以上、そこに準拠した感情観

⁶ ここでは市民的資本主義的な経営者像との表面的な符合(自立的独立的な行為者像)が指摘されているだけだが、より詳細に、市民階級と内面性との関係を検討したものにレベニース [1987: 106-127]がある。十八世紀のドイツ市民は権力から排除され、その世界逃避の結果として内面性へと後退するメランコリーに陥った。だが悲哀は十六、十七世紀の情念論とは違って、人間性の謳歌として評価されるようになっていく。この議論では、エリアスでは未消化であった、肯定的な感情統制と内面性開発との相乗効果が明確に指示されていることに注意すべきである。ただしこれらの事態は静態的な状態へと還元してはならず、あくまでも過程として理解されるべきであり(エリアスの基本命題→プロセス社会学のひとつ)、その意味で確固たる「自己」「自我」が十八世紀の時点で成立していたかについては別の歴史的考証が必要となる。

も批判の対象とならざるを得ない。言うまでもなく、その第一は「内的経験としての感情」を普遍的に措定することである。この問題が端的に現れるのは「感情表出」という発想である。

感情表出もしくは感情表現という発想が成立するのは、(1)感情それ自体と、(2)言語的・身振りの・表情的な行為が、空間的(時間的)に隔てられ、一方が不可視の内密性(先行)、他方が可視的な公共性(後行)を割り当てられ、両者をつなぐ(3)意味作用(時間的要素が組み込まれれば因果作用)が前提とされるからである。いわば、これら要件化された三項による図式こそが「感情表出」の本体と考えられる。とすれば「homo clausus」の否定により、内部/外部の空間的区別や内的感情の普遍的な存在が疑問視されたいま、「感情表出」それ自体にも疑義が呈せられねばならない。

エリアスも「表情」を問題にする。「顔の配置の特定の範型がある感情の「表現」であり、あたかも感情が原因で、表情筋肉の運動が結果であるかのようによく語られるのだが、それは転倒している」「顔という信号と感じるということとの関係は、作用の原因に対する関係とは違う。両者は原初的にはひとつの同じ人間の反応の側面であり、感情と表現は第一次的には互いに補完してひとつの全体を作っている。文明化の範型にしたがって、ようやく徐々に、感情喚起としぐさや表情筋の運動の間に、隔壁が引かれていったのである。そしてまた徐々に、より分化した社会の子供たちが、感じていなくても微笑む、ということを手伝っていったのである。そうやって初めて、人間には、あたかも自分本来の自我が内面に捕らわれ、他者に関わることなく離れて存在しているかのように思えてきたのである」[1984: 15].

ここには「感情表出」をアプリアリとすることへの明確な否定的態度とともに、自明化したその種の表情観の歴史的生成を再度、文明化の枠組みで説明しようとするエリアスの基本姿勢が示されている。だがここか

ら、感情を一元的に社会的なものに還元する「感情社会学主義」として彼の主張を読めば、それは間違いである。彼は自らの表情論の発想を、医学部時代の解剖学的知見にさかのぼって回想しているが、そこでは笑いや微笑みの社会的側面を生物学的側面と切り離してはならないと述べられている [1984: 14].

2.4 感情の生物性と社会性

笑いをはじめ、動物と比較して極度に個人化された人間の表情は、顔面筋肉の生物学的に特有な被造型性や多様性（類人猿と比べて非常に分化した明確な特徴を持つということ）に基づいており、それはとりもなおさず、人間という種が本性的に（表情による信号作用をはじめ）他者とのコミュニケーションによる共同生活に適合するよう調整された生物だということである [1984: 14-15]⁷.

その意味するところは別の箇所 [1987: 342-353] で感情をめぐる三つの人間学的な仮説として整理される。第一は、ヒトは進化論的には、遺伝的プログラムによる行動が学習による行動に大きく置換されたという意味で、あるブレイクスルーを経た、というもの。第二は、ヒトは学習可能性を拡大しただけでなく、学習しなければならない存在だ、というもの。遺伝的な生物学的装備の機能は弱化し、他者とのコミュニケーションによる社会的な蓄積（言語、知識など）の獲得が必須だという、ホモ・デメンス

⁷ エリアス [1987: 339] は心理学や生物学がヒトと他の動物に共通する構造的側面を情動に見いだすのに対して、自分のプロセス社会学は動物との共通性と共に、特殊人間的な情動をも対象にする、と述べている。またここで注意すべきは「経験から学び、世代間で知識を伝達し、新たな要求に基づいて集団生活を変えることを人間に可能にする生物学的特性に注目すべき」 [1987: 343] と言われても、それが生物学的還元主義もしくは生物学的規定性を重視する立場ではないということである。エリアスによれば生物学的分化（成熟）と社会的分化は理論上は等価であり、「生物学的過程と社会的過程という、二つのタイプの過程の間の機能的依存は相補的である」 [1987: 349].

思想である。第三は「成人の感情は決して、完全に非学習的で、遺伝的に固定された反応パターンというわけではない」[1987: 352]、というものである。

一見してそれが、進化論的な変異という生物学的次元と学習・社会化という社会的次元を接合し、両者を「人間性」にとって必須の要件として包含する試みであることがわかる。とりわけ第三の仮説、感情に関する禁欲的（部分否定の）言明には、生物性と社会性の両要件を感情理解に取り込むべきとする彼の意志が読み取れる。とりあえずその意志を承認しよう。だが次の問題は、その意志がどこに向けられているのか、である。

感情一般を主題的に扱ったこの論考[1987]には、その目的として二つが挙げられている[360-361]。ひとつは先に扱った「感情表出」の問題性を指摘すること。そして二つ目は、感情を孤立して扱い、人間の他の多様な側面と無関係に研究すれば、それは非生産的だという指摘である。これらの指摘、特に第二の指摘の送り先は明らかに、彼が見た伝統的な心理学や生理学である。つまり社会関係という文脈を排除して（社会的な他者依存性という観点の無視）、静態的な生理的・生物学的構造にだけ準拠して（進化論的に獲得された生物学的な他者依存性という観点の無視）、個体の感情をあくまで孤立的な事象として分析する試みへの批判である。であるなら彼の意志は、相互依存的・他者依存的な人間存在という枠組みの中で感情を研究することに向けられていると考えざるを得ない。そこに歴史の変容を加味すれば、それが文明化論への道路標識であることは明らかである。こうして至極当然の結果、感情一般に関する彼の議論は（制作時期は大きく前後するのだが）文明化論を指向し、その地ならしとなる、ということが確認される。

2.5 感情モデル化と自然状態

そしてもうひとつ、その地ならし効果として「モデル化」概念を整理

することがここで可能となった。それは同時に感情理解に関わるひとつの難問を提供する。つまり、感情なるものに関係して、エリアスの議論にみられる、一方での「白紙で無定形の情動世界」、他方での「自然状態の否定」をどのように関係づけて理解すべきなのかである。

答はエリアスのモデル化概念とその基盤となる感情理解にある。確認しよう。エリアスによれば、進化論的には生物学的に不全な存在（遺伝子プログラムによる生命活動の不全）である人間はその行動や感情を具現化する際に、社会的な（他者による）調整もしくは鑄造を必須とする。モデル化とはこの社会的調整作業を意味する。人間は生物学的にモデル化を必須要件とするのであり、モデル化を介しない行動や感情は実現し得ないことになる。したがって（近代西欧社会、中世社会、未開社会だろうが）いかなる社会においても、そこで具現化された感情は何らかのモデル化を通じた所産なのである。その意味で社会的介入ゼロの自然状態は想定しえないことになる。エリアスの基本的立場はこれである⁸。

しかし、である。少なくとも三つの可能性がエリアスの言説に自然状態の想定を許すことになる。第一は、モデル化概念がモデル化に先行する状態を論理的に想定させるにもかかわらず、その正体が感情か否か、あるいはそのどちらでもあり得るのかに関してエリアスの立場が不明だということ、である。もしモデル化に先行する状態が「感情」であるなら、それは彼の基本的立場に矛盾して自然状態の感情と言わざるを得ない。もし違うなら、今度は次の第三の論点と抵触する。第二は、（先に注で紹介したよ

⁸ それゆえファン・クリーケン [1989: 214] は欲動・衝動・自発性・本能・情熱といった概念が使用されていることにエリアスの議論の矛盾を見いだす。だがそれらの概念がすべて、一切のモデル化を拒否した内容であるのかどうかは、実は吟味すべき課題である。またこの観点は普遍的文明化というイデオロギー的発想とも関連する。ホモ・デメンスたる人間が生物学的にモデル化（＝文明化？）を生存の要件とするなら、論理的に、すべての社会・人間集団に文明化論が適用されるべしとならざるを得ない [Schröter 1990: 53]。

うに) 人間と他の種に共通する感情をもプロセス社会学が扱うという綱領である。そこで言われる感情がモデル化済みとは考えにくい。そして第三に、子供の感情への言及である。モデル化が必須要件ならば、胎内でのモデル化を強弁しないかぎり、新生児の「感情」を感情として語ることはできない。つまりエリアスはモデル化抜きに感情に言及しているのである⁹。

こうしてみると「自然状態の有無」に関してはエリアスの議論自体に矛盾もしくは不鮮明が存在するのは明らかのように思われる。とはいえその矛盾はある意味で必然である。なぜなら彼は、既存の支配的な感情論、主に心理学・生理学によって与えられていた個別主義的な分析を越えて、文明化論に展開される感情論へと誘うために、生物進化論によって社会学的次元の感情への導入を根拠づけ(モデル化の必須要件化)、感情理解に生物性(この次元はエリアスにとって疑うことのない自明な次元であったと思われる)に加えて社会性を投入しようとしたからである。先の矛盾とは、結局のところこの生物性と社会性の齟齬である。

だとしたら矛盾からの出口もそこにある。すなわち感情概念の多義性を主張し、内容的な次元を区分けするという方途である。とにかく生物性と社会性を分析的に別立てとし、異なる次元として配置すればいい。

エリアス[1987: 352-356]はその方向で、感情を三つの構成素、つまり生理学的要素、行動的要素、感情的要素(feeling)に区別する。多くは未確認だとしながらも、エリアスは生理的要素(血糖値や動悸などの変化)が人間と他の動物に共通する一方、行動的要素(闘争や逃走あるいは表出など)のステレオタイプ化の程度は両者に開きがあり、感情的要素

⁹ 新生児、乳幼児の「感情」に言及する場合、感情を個体(子供)に内属させず、母子関係内部へと帰属させれば(例えば増山[1991]の「情動の場」やCampos/Campos/Barrett [1989]の感情の関係論的理解など)、何らかの社会的調整を認める素地が生まれる。それは homo clausus 的感情観の克服なのであるが、残念ながらエリアスにそこまでの展開は認められない。

(主観的経験)については多分、人間独自のものではないかと述べている。

こうして感情を三つの次元に分け、それらを生物性と社会性を両極とするスペクトラムの中に位置付けることで、自然状態とモデル化された状態という二つの言明に根拠を与えることになる。先に矛盾として現れた、生物性と社会性の齟齬とは各々の次元を混同した結果だというわけである。たとえば文明化論から導出された感情内在化の命題は主に感情的要素に関わるものであって、生理的要素に言及するものではない、ということになる。また感情表出概念への批判も、本来は感情に含まれるべき行動的要素が感情から排除され、いわば原因に対する結果として、感情的要素に従属させられた、ことへの批判となる[1987: 355]。さらにいえば、文明化の過程の中で、感情の三構成素が分断され、感情的要素の突出とそこへの感情概念の局限化が生まれたことになる。

エリアス[355]は三つの構成素を等価に包含する概念を広義の「感情」とし、感情的要素に限局されたものを狭義の「感情」として、とりわけ狭義の感情理解による弊害(端的に homo clausus 的人間観のそれで、たとえば真実の隠された自己と表現された歪んだ像という発想や感情の対他的コミュニケーション機能の軽視など)を論じていたわけである。

3. 文明化論と感情社会学

最後にまとめとして、エリアスの文明化論および感情論に関するいままで提示してきた議論、本稿および岡原[2009]で提出された論点を、感情社会学との連動という文脈で、整理してみよう。暫定的に命題形式にしてみる。それらの命題はそれぞれ、感情社会的営為にとって、基本的視角もしくは公準、あるいは研究プロジェクトを提供するという意味で、貢献するものと理解される。

命題 I—感情生活は社会構造に依存する。

人間の感情は生理学的に遺伝プログラムによって決定された機構に基づく現象ではなく、(エリアスによれば種にとって進化論的に要請される必須要件として) 社会的・対他的な調整・介入つまり「モデル化」を経て初めて成立するものである。特定の社会に生きる成員が営む感情生活、つまり感情経験・表出や感情統制の様態は、その社会の構造的な変数によって変化する(強い主張を施せば「決定」される)。この命題は単に、人間の感情生活を脱自然化し、その社会的可変性を主張するだけでなく、社会構造的変数を明示することで、感情の社会的規定性により具体的な相貌を提供する。すなわち、社会分化(人口密度の増大、競争関係の激化、社会的分業の増進など)と国家形成(権力・暴力の独占、経済資源の独占)が社会構造的変数とされ、それは社会的相互依存関係のパターンを意味するフィギュレーション概念に包摂される。このフィギュレーションの様相が個別特殊な感情生活を規定することになる¹⁰。

しかし問題点として、特定フィギュレーションと特定感情様式との間の接合が十分に説得的に描かれていない、ということがある。宮廷社会では「王という仕組み」[1978: 244-]をめぐって相互依存する廷臣・貴族は社

¹⁰ 言うまでもないが、エリアスが見る個別特殊性とは集合的な次元であり、個人的差異を意味するものではない。とりわけ強調されるのは実は階級的特殊性である。本稿では中世から現代にわたる西欧社会の総体的発展(いわゆる文明化過程)に主眼を置いたため、階級の視点に十分な目配りを与えられなかった。エリアスは社会階層の再編[1977: 185]や市民階級的な社会化審級としての家族と自己統御の深化[1977: 286, 360]、階級間の行動様式変遷・普及の原理として(現代用語では)ディスタンクション[1977: 230]やトリクルダウン[1977: 235]に言及し、文明化論の見取り図においても、階級間の行動・感情様式の幅の縮小[1978: 363-]や階級間の依存・排斥・侵入関係[1978: 432-]を基本的主題として取り上げている。彼がいかに階級の視点を重視するだろうか、[すべての社会階層において、これらの階層の機能に応じて、これら階層に属す人々にとって最も重要な行動領域はまた最も慎重に、最も集中的にモデル化される] [1978: 438]という言葉を待つまでもなく、西欧社会の歴史的変遷が同時に主導的な社会階層の交代劇であったこと、さらに社会構造的変数(分業・競争関係や社会資源・経済資源の所有・独占など)に関わる社会学的カテゴリーとは正に社会階級であること、を鑑みれば容易に看取されるだろう。

会的成功のためにマキアヴェッリの行為者として感情を統制する、といった類の説明。あるいは、複雑に分化した役割社会では個人は相互に複雑に依存し合い、より精密な対人関係の調整が必要となり、感情統制の精密さや安定性を増さざるをえない、といった一般的言明にとどまる。そこには一種の機能的説明が示されるのだが、それも常識的範疇を越えない。さらにそれ以外の説明様式の可能性も吟味されてしかるべきである。

また、命題Iを強い主張とすれば、それは社会構造という独立変数と感情生活という従属変数の関係として定式化される [Flap/Kuiper 1981: 293, Gerhards 1988: 229]. 社会発生と心理発生の相互性を念頭においていたエリアスではあるが、その行論に逆の変数関係が等しく登場するとは言えない¹¹.

そこで批判すべき論点として、感情生活の従属的性格を挙げることができる。比喩的にはその批判は俗流マルクス主義的な論法への批判と同質である。土台への上部構造の従属の如く、感情生活とはいったい従属的な領域でしかないのだろうか。社会構造への積極的な作用、とりわけその変革的な諸力を設定すべきではなからうか。たとえばM・ヴェーバーはカリスマ的権威を官僚制的な合理化と並んで歴史的な変革の原動力のひとつに数えている。あるいはまたヴェーバーの『中間考察』を考慮すれば、自律的な意味領域としての展望が感情生活にも理論的な可能性として与えられるであろう。「性愛」が、ヴェーバーによって、経済や政治に対して固有法則性を内包する自律的な領域として規定されていたことを思えば、むしろ、感情生活が社会構造的変数から少なくとも相対的に独立した意味領域であると、積極的に主張すべきだろう [Weber: 1972, 岡原 1994].

これらの論点は、エリアスのみならず、感情の社会的構築に目を向けが

¹¹ 確かに断片的には、「この種の感情は、いわば特定の社会的条件に即応した人間性の現れであり、そしてこんどは逆に歴史的社会的過程に影響を及ぼす要因をなしているのである」[Elias 1977: 321]といった発言はある。

ちで、感情による社会的現実の構成には同等の関心を向けてこなかった感情社会学への警鐘でもあろう。

命題 II—感情生活の歴史の変容は特定の方向性を持つ。

『文明化の過程』の基本テーゼ、すなわち文明化という歴史的方向性の提示を感情現象に集約しつつ（といっても文明化論の主軸に感情生活の歴史の変容が位置することは確かであるが）、定式化した命題である。その内実は感情統制の歴史的に特殊な高度化として整理される。衝動/情動抑制の増大、羞恥/困惑の閾値の低下、（外的強制から自己統御への転化とその強化・安定化という）統制審級の内在化、それらがそこに含意される感情統制の高度化である¹²。まずこの論点こそ、感情の長期的な歴史変動を扱いにいく感情社会学を多に補完するものであることを確認しよう。

注意すべきはそれが、個々の内容的規定を注入されぬままの一般的な歴史的变化の存在を単に示唆するものではなく、特定の歴史的地理的空間

¹² ゲルハーツ [1988: 230] は、文明化論の構成要素を整理したフラップ/クイパー [1981] に依拠して、感情に関わる文明化論の部分領域を 10 提示している。

- a. 表現される情動性の程度。
 - b. 行動における短期的情動と長期的熟慮の割合。
 - c. 感情統制の均衡と一様性。
 - d. 道徳的に要請される、統御された行動の程度。
 - e. 思考と行為における私的領域と公的領域の分離程度。
 - f. 羞恥/困惑の閾値の高さ。
 - g. 感情統制が内面化される程度。
 - h. 良心形成の程度。
 - i. 「自己統御」と「外的強制」の割合。
 - j. 生理的欲求や物理的暴力の使用に際して生まれる、吐き気や嫌悪の感受性。
- だが、「感情の内在性」や「感情表出概念の歴史性」等を問題にしてきた本稿では、さらにフラップ/クイパー [1981: 277] より、k. homo clausus 経験の程度、l. 個人化の程度、を引き上げて置く必要がある。また上記の項目のうち、a. b. は衝動/情動抑制に、d. g. h. i. は統制審級の内在化に、f. j. は同類項としての羞恥/困惑の閾値低下に、e. k. l. は homo clausus という主題系に、整理される。残りの c. は感情統制自体の安定化というメタ次元に解することで、そのすべての項目がいずれにせよ何らかの形で本稿で扱われたことになる。

(中世以降の西欧社会)での具体的現実的な変化の様相を述べたものだという事である。したがって利点として、西欧社会を対象に社会史・心性史が精力的に析出してきた歴史的産物たる個別的感情現象を整理するための準拠枠を、文明化論が提供できるかもしれない、ということは挙げられる(歴史的感情社会学の構想)。

この命題には拡張版が存在する。つまりその妥当性を、時間的にギリシャ・ローマ時代にまで拡張する、空間的に非西欧圏・未開社会にまで拡張する、というものである。いわば普遍的文明化論の主張である。この普遍化テーゼについては、文明化論の図式が、本命題の限定された対象範囲を越えて、個別的な事例(たとえば、具体的なアテネ社会とかマイクロネシアの特定部族など)の各々についても妥当するか否かは留保しつつも、本稿では、それがイデオロギー的な難点を抱えるという理由で、普遍的法則としての定立は廃却されるべきものと考えている。この点は、エリアスによる歴史的資料の解釈などの妥当性ととも、本命題の問題点として登録されるべきだろう。

時間的・空間的に、歴史的地理的にその主張の妥当する範囲を拡張していくのが、すでに言われた普遍化であったとすれば、社会領域の隅々まで文明化が進展するというのが、もうひとつの普遍的文明化論の姿である。さらにエリアスは社会分化の歴史的な増進を前提にしている。ということは単なる分業の進展に関する認識を越えて、少なくとも暗示的には、多様に分化し相互に独立する社会領域の量的増大を彼は認めていたことになる。そこに文明化論がかぶせられる。すると彼の主張は、いくつもの増大する社会領域のそれぞれ(政治・法律・経済・家族・教育・医療・宗教・軍事…)において文明化が進展した、という内容を持つことになる。

しかし、である。個々の領域に等しく均一的な文明化がなされたと言えるだろうか。進展の度合いの問題ではない。ある社会領域ではむしろ文明化とは逆の感情統制が積極的に擁護されたということはないのだろうか。

たとえばスポーツの発生をエリアスはあくまでも長期的な文明化の過程の枠内で解釈したわけだが、興奮喚起装置としての特性がうまく理論的に位置づけられているとは言えない。なぜなら、文明化による包括的な抑制状態が、情動・緊張のバランスをとる安全弁として感情喚起的な文化制度を要請するという議論は、一見すると説得的だが、その限定された妥当性を越えて、長期的な視点を取ると、矛盾が露呈してしまうからである。すなわちこの議論からすれば、「より暴力的で」「より抑制が乏しい」ギリシャ・ローマ時代には安全弁カタルシスなどは「より」必要であるはずがない。ところがである。疑問は言うまでもないだろう。

おそらく、感情喚起的作用への重要な着目にもかかわらず、少なくとも『文明化の過程』では、依然として衝動・情動抑制的な文明化のイメージに捕らわれた（いわば文明化の普遍性にこだわった）ため、エリアスは感情喚起的な制度をそれ自体の資格において十分に理論化することができなかった、それゆえの矛盾だろう。スポーツ・余暇という社会領域だけでなく、情緒的な社会空間として醸成された近代家族の領域 [Shorter 1987, 山田 1994] など、とりあえず文明化の図式とは離れた感情統制の可能性を吟味すべき社会領域がある。だとしたら一義的で一様な感情生活を想定してしまうことは、多様に分化した個別の社会諸領域に応じた、それぞれの感情生活の働きを考察から逸する恐れがある。

ただし、この問題設定がエリアスにまったく欠けていたわけではない。公的領域と私的領域の歴史的な分割に彼は言及している。「文明の進展につれて、人間生活そのものの中で私的ないし秘密の領域と公然の領域とが、また秘密の行動と公然の行動とが、ますます強く区別されるようになる。そしてこの分裂は人間にとって自明のこととなり、違反し難い慣習となって、人間自身にとってもほとんどそれが意識されなくなる」[1977: 366]。重要なのは、その際に特定の衝動形式、感情経験・表出が「公共生活から締め出され」[1977: 363]「完全に内密化し、特定領域に閉じ込め

られ、いわば『閉ざされた扉の背後』に押しやられる」[366]という指摘である。例えば性衝動・性感情である。つまりエリアスも領域によって異なる感情生活の存在を、図式的ではあるが認めていたのである。

結局、重要なのは、普遍的な文明化傾向を論じるのではなく、多様に複雑に分化する社会諸領域の中で、どの領域が特殊歴史的な文明化的な感情統制に従い、どの領域がそれとは異なる感情統制（煽動的な感情の産出に向けられた社会統制）に服するのを見極める、ことであろう¹³。この点は、感情管理の一般化を論じがちな感情社会的な現代社会論にとっては、耳の痛い話である。

¹³ すでに言及したように、文明化論批判として、現代社会への適用可能性を疑うものがあるが、その批判や反批判で留意すべきは、この領域的な相違をどう捉えるかである。単なるエリアス攻撃なら、その普遍化的主張を崩せばいい。たとえば、デュル[1994: 124-125]は現代において男性産婦人科医と女性患者との関係を非個人化・客観化・幼児化・脱セックス化・脱男女関係化する多様な装置の存在を指摘し、それが十分自己統御できない人間の存在、つまり文明化論の反証を提示しているとして、エリアスを批判する。このような批判を展開することに意味があるとは思えない。社会分化という現実を見据えて、「分化した文明化」の様相を探ることこそ必要だろう。したがって、感情コミュニケーション機能の社会的意味の歴史的推移に関しても、一概に上昇もしくは下降した、という結論を導くのではなく、自律した社会諸領域のそれぞれに応じた分析が要請されることになる。言語コミュニケーションが相対的に突出する領域、科学や官僚制。感情コミュニケーションが相対的に突出する領域、家族や芸術などである。

S・プロイアー[1988]も結論部で同様の批判を開陳している。エリアスの議論に対して、まずマルクス主義から、商品世界・資本主義システム・近代家族・公共性などの主題化の欠如を指摘し、次にフロイトに依拠した心的機構のモデルについては、それ自体がブルジョア家族を前提にした階級的性格を帯びているにもかかわらず、その歴史性が考慮されていないと批判し、最後にシステムの視角から、相互行為・組織・全体社会などのシステムがそれぞれ十分に分化して把握されておらず、そのため相互行為次元の行動形態が全体化されてしまった、と述べる。その上でプロイアーは「問題なのは…社会全体の過程を文明化過程として解釈しようとしたことであり、…文明化概念自体は空疎化され、抽象化され過ぎ、ついには『単なる情動の統制』となり、区別すべき質を失ってしまった」[1988: 430]と結ぶ。

命題 III—感情は（禁止的/煽動的に）統制される（管理される）。

感情統制一般論への布石が与えられる。命題 II にある特殊歴史的な感情統制の議論が持つインプリケーションであり、命題 I を統制的観点から定式化したものである。

命題 I および II を前提にすれば、いわゆる感情モデル化が無秩序なランダム性をおびた現象ではなく、一定の規則性（その厳密さの程度は等閑視するとして）を示すことは明らかである。この規則性（規則的な感情モデル化の帰結として、感情生活や個々の感情経験表出現象の規則性）を効果として現出させる諸作用は総じて統制的と形容することができる。その場合、分析的には、効果を楽しむ主体つまり統制主体として、個人と集合体を分けることができる。たとえば次のような場合である。（個人的）感情統制によって、個人は円滑かつ戦略的な相互行為の中で社会的上昇を手に入れる《宮廷社会での生存競争》。（社会的）感情統制によって、集合体は他の拮抗する集合体との差異を具体化したり《上流階層の団結強化》、緊張緩和のための安全弁（カタルシス）を設置したりする《演劇、スポーツ等の文化制度》。

感情現象の規則性を効果する諸作用（つまり感情統制）を主導するのは、規則、規範、あるいはエリアスの用語では基準であり、作用の現実的形態は、外的強制としての権力、自己統御としての良心・超自我、あるいは興奮喚起装置としての文化制度などである。また文明化論に含意された

¹⁴ アヴェリル [1986: 113] はエリアスの議論では感情の統制的規則（＝禁止的統制）のみが扱われ、構成的規則（＝煽動的統制）が無視されたと批判している。本稿の読者にとって、この批判の浅薄さを明らかだろう。ヴォウタース [1989: 706-707] も同様に、アヴェリルによる批判は間違いで、むしろエリアスは構成的観点を裏づける経験的証拠を提出したのだと、反論している。ところで、この二方向性はすでに命題 III に内在するものであり、取り立てて命題 IV に明示させる必要は理論的にはない。にもかかわらず二方向性を明示したのは、近代社会の常識的解釈「感情は自然であり、そこへの人為的な介入・統制は常に禁止的・抑圧的である」を意識してのことである [岡原 1987 参照]。

通り、感情統制の方向性は二様である¹⁴。すなわち、ある感情の現出にとって二方向、禁止的及び煽動的でありえる。たとえば、怒りを禁止する統制（工場労働の規律）と怒りを煽動する統制（革命組織の規律）がありうる¹⁵。

一方、文明化論の特殊歴史性を払拭すれば、一般概念として、感情統制の高度化とは、特定の感情現象を効果として生起させる作用・機構の生産性が上昇することを意味する。したがって文明化の内容とは違って、例えば医学教育や医療行為という社会制度内部では、診察・手術・解剖などをめぐる羞恥心・不快感の閾値の上昇（経験しにくくなること）が感情統制の高度化に数えられることになるだろう [Smith/Kleinman 1989]。

さらに、統制という事態についてだが、XがYを統制するといった一次元的な理解ではなく、エリ阿斯には統制への自覚的な関与による変更という事象もその視野に取められていた。「感情統制の統制された脱統制 controlled decontrolling of emotional controls」という言明を取り上

¹⁵ 怒りの禁止的統制に関しては、労働との関連でスターンズ [1988]、ゴードン [1990: 166] など。怒りの煽動的統制に関しては、体系的議論としてはコーザー [1978]、政治的カリスマ論との関連ではフリードランド [1964]、ボード [1975]、リンドホルム [1988] など。革命組織としての規定を度外視すれば、ソビエト共産党員の感情生活がもつ統制的性格は次の指摘によく示される、「よきコミュニストは、友人・親類を非難し、恋人を裏切り、おそらく自らを非難することさえも恥ずかしくないし、良心の呵責を何も感じなかった。人民の敵に一片のパンを与えたなら現行犯で逮捕されてもよいと思うばかりか、そうした行動に内在する党への不従順・不忠誠のゆえに良心の呵責を本当に感じもした」 [Feher/Heller/Markus 1984: 216]。

¹⁶ エリアスのこの発言は、ヴォウタース [1986: 3,15] によれば、1970-1971年にアムステルダム大学での講義で使用された。同じ内容は余暇活動の議論にも現れる。「すべての余暇活動は、感情の抑制の規制された解除を含んでいる」「余暇活動の決定的な特徴は、高度に統制された産業社会だけでなく、われわれが見る限りでは、他のすべての種類の社会においても、感情の抑制の解除それ自体が社会的にも個人的にも規制されているということである」 [Elias/Dunning 1995b: 138]。

げよう¹⁶。この概念には二つの次元の統制が含まれる。ひとつは文明化論の主題となる特殊歴史的な感情統制であり、もうひとつはその統制を対象にした高次の統制である。

自覚的な統制とその反省性の高次化はのちにヴォウタースら「インフォーマル化」論者の支柱になる。と同時に、感情社会学の基本概念である、感情体験を意図的に変更する営みとしての「感情管理」、それがもつ絶えざる反省性という、現代的自己に関わる主題系を彷彿とさせる。あるいはまた、市場労働としての感情管理すなわち「感情労働」について言えば、統制原理の異なる複数の感情労働とそれら感情労働間にある格差の問題を推論する素地が与えられていたと言えよう [岡原 2008]。

以上、本稿では、エリアス文明化論をその主著以外の論考によって精査する作業を行った。その上で、感情社会学にとって貢献しうる視点の切り出しを行った。私としては後期資本主義社会における感情管理の高度化と感情資本の成立を、文明化論を補助線にしつつ解明していくつもりである。

参考文献

- 安倍彰・有馬斉（編）2009『生存学研究センター報告 8 ケアと感情労働』立命館大学生存学研究センター
- Averill, J. R. 1986 “The Acquisition of Emotions during Adulthood” in Harre (ed) 1986 *Social Construction of Emotions*. NY.: 98-118
- Bogner, A. & Wouters, C. 1990 “Kolonialisierung der Herzen? Zu Arlie Hochschilds Grundlegung der Emotionssoziologie” *Leviathan* 18: 255-279
- Breuer, S. 1988 “Über die Peripetien der Zivilisation. Eine Auseinandersetzung mit Norbert Elias” *Leviathan Sonderheft 9 (Politische Psychologie heute)* 1988: 411-432
- Bord, R. J. 1975 “Toward a social-psychological theory of charismatic social influence processes” *Social Forces* 53
- Campos, J. J., Campos, R. G. & Barrett, K. C. 1989 “Emergent Themes in the

- Study of Emotional Development and Emotion Regulation”
Developmental Psychology 25: 394-402
- Coser, L. A. 1978 『社会闘争の機能』新睦人訳 新曜社
- Duerr, H. P. 1994 『秘めごとの文化史—文明化の過程の神話 II』藤代幸一・津山拓也訳 法政大学出版局
- Dunning, E. & Sheard, K. 1983 『ラグビーとイギリス人—ラグビーフットボール発達の社会学的研究』大西鉄之祐・大沼賢治訳 ベースボール・マガジン社
- Dunning, E. 1995 「序文」 in Elias/Dunning 1995: 1-26
- Dunning, E. 1995a 「スポーツにおける社会的結合と暴力」 in Elias/Dunning 1995: 328-357
- Elias, N. 1977 『文明化の過程・上—ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷』赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳 法政大学出版局
- Elias, N. 1978 『文明化の過程・下—社会の変遷 / 文明化の理論のための見取図』波田節夫・溝辺敬一・羽田洋・藤平浩之訳 法政大学出版局
- Elias, N. 1978 “Zum Begriff des Alltags” KZfSS Sonderheft 20: 22-29
- Elias, N. 1984 “Notizen zum Lebenslauf” in Gleichmann/Goudsblom/Korte (hg) 1984: 9-82
- Elias, N. 1986 「スポーツと暴力」桑田訳 in 『叢書・社会と社会学 3』: 93-130
- Elias, N. 1987 “On Human Beings and Their Emotions: A Process-Sociological Essay” Theory Culture & Society 4-2, 3: 339-361
- Elias, N. 1995 「序論」 in Elias/Dunning 1995: 27-88
- Elias, N. 1995a 「社会学的問題としてのスポーツの発生」 in Elias/Dunning 1995: 181-216 (=Elias 1986)
- Elias, N. 1995b 「スポーツと暴力に関する論文」 in Elias/Dunning 1995: 217-252
- Elias, N. & Dunning, E. 1995 『スポーツと文明化興奮の探求』大平章訳 法政大学出版局
- Elias, N. & Dunning, E. 1995a 「余暇における興奮の探求」 in Elias/Dunning 1995: 89-130
- Elias, N. & Dunning, E. 1995b 「自由時間のスペクトルにおける余暇」 in Elias/Dunning 1995: 131-180
- Feher, F., Heller, A. & Markus, G. 1984 『欲求に対する独裁—「現存社会主義」の原理的批判』富田武訳 岩波書店
- Flap, Henk. / Kuiper, Yme 1981 “Figurationssoziologie als Forschungsprogramm” KZfSS 33: 273-301

- Foucault, M. 1977 『監獄の誕生 監視と処罰』田村俣訳 新潮社
- Foucault, M. 1978 『哲学の舞台』渡辺守章訳 朝日出版社
- Foucault, M. 1986 『性の歴史 I 知への意志』渡辺守章訳 新潮社
- Friedland, W. H. 1964 “For a Sociological Concept of Charisma” *Social Forces* 43: 18-26
- Gerhards, J. 1988 *Soziologie der Emotionen: Fragestellungen, Systematik und Perspektiven*. München
- Gleichmann, P., Goudsblom, J. & Korte, H. (hg) 1979 *Materialien zu Norbert Elias's Zivilisationstheorie*. Frankfurt a.M.
- Gleichmann, P., Goudsblom, J. & Korte, H. (hg) 1984 *Macht und Zivilisation. Materialie zu Norbert Elias's Zivilisationstheorie 2*. Frankfurt a.M.
- Gordon, S. L. 1990 “Social Structural Effects on Emotions” in Kemper (ed) 1990: 145-179
- Goudsblom, J. 1984 “Zum Hintergrund der Zivilisationstheorie von Norbert Elias: Das Verhältnis zu Huizinga, Weber und Freud” in Gleichmann/Goudsblom/Korte (hg) 1984: 129-149
- 廣松渉 1986 「表情現相論序説」『現代思想』14-2: 202-230
- Korte, H. (hg) 1990 *Gesellschaftliche Prozesse und individuelle Praxis. Bochumer Vorlesung zu Norbert Elias' Zivilisationstheorie*. Frankfurt a.M.
- Lepenies, W. 1987 『メランコリーと社会』岩田行一・小竹澄栄訳 法政大学出版局
- Lindholm, Ch. 1988 “Lovers and leaders: A comparison of social and psychological models of romance and charisma” *Social Science Information* 27: 3-45
- Maguire, J. 1992 “Toward a Sociological Theory of Sports and the Emotions: A Process-Sociological Perspective” in Dunning, E./Rojek, C. (ed) 1992 *Sport and Leisure in the Civilizing Process*. London: 96-120
- 増山真緒子 1991 『表情する世界=共同主観性の心理学』新曜社
- Negri, A. & Hardt, M. 2005 『マルチチュード (上下)』幾島幸子訳 NHK ブックス
- 岡原正幸 1987 「感情の社会学的理解」『社会学評論』151: 17-31
- 岡原正幸 1994 「感情社会学の主題系, 古典から—Max Weber」『哲学』96: 77-101
- 岡原正幸 1998 『ホモ・アフェクトス』世界思想社

- 岡原正幸 2008 「エモーションコンシャスな時代における感情労働」『アディクションと家族』25: 191-197
- 岡原正幸 2009 「感情と文明化論～エリアス派感情社会学の礎石」『哲学 慶應義塾創立 150 年記念特集号』(近刊)
- 岡原正幸・山田昌弘・安川一・石川准 1997 『感情の社会学—エモーション・コンシャスな時代』世界思想社
- Outram, D. 1993 『フランス革命と身体』高木勇夫訳 平凡社
- 崎山治男 2009 「感情の用法: 感情による用法～感情労働概念の再構築に向けて」 in 安部/有馬(編) 2009: 145-163
- Schröter, Michael 1990 “Scham im Zivilisationsproze. Zur Diskussion mit Hans Peter Duerr” in Korte (hg) 1990: 42-85
- Shorter, E. 1987 『近代家族の形成』田中・岩橋・見崎・作道訳 昭和堂
- Smith, A. C III & Kleinman, S. 1989 “Managing Emotions in Medical School: Students’ Contacts with the Living and the Dead” *Social Psychology Quarterly* 52-1: 56-69
- Stearns, P. N. 1988 “Anger and American Work: A Twentieth-Century Turning Point” in Stearns, C. Z./Stearns, P. N. (ed) 1988 *Emotion and Social Change*. N.Y.: 123-149
- van Krieken, R. 1989 “Violence, self-discipline and modernity: beyond the civilizing process” *The Sociological Review* 37-2: 193-218
- Weber, M. 1972 『宗教社会学論選』大塚久雄・生松敬三訳 みすず書房
- Wouters, C. 1986 “Formalization and Informalization: Changing Tension Balances in Civilizing Processes” *Theory, Culture & Society* 3-2: 1-18.
- Wouters, C. 1999 *Informalisierung. Norbert Elias’ Zivilisationstheorie und Zivilisationsprozesse im 20. Jahrhundert*. Opladen.
- 山田昌弘 1994 『近代家族のゆくえ—家族と愛情のパラドックス』新曜社